

広域的に葉いもち防除を行った「ひとめぼれ」栽培地域で 穂いもち防除を省略した場合の被害発生リスク

「ひとめぼれ」において、広域的に葉いもち防除を行ったうえで穂いもち防除を省略した場合の被害発生リスクについて、現地を調査を行った結果をご紹介します。

【1 成果の概要】

- (1) 箱施用剤を使用し、7月下旬に葉いもちの発生量を極めて少なく抑制した地区では、穂いもち防除の有無に関わらず、穂いもち被害発生リスクが低くなります(表1)。
- (2) 葉いもち多発圃場がある地区で穂いもち防除を省略すると、穂いもち被害発生リスクが高くなります。このような場合、同地区内の葉いもち少発生圃場でも穂いもちが多発する可能性があります(表1、図1)。
- (3) 以上より、穂いもち防除を省略しても被害を発生させないためには、葉いもち防除の徹底により、広域的に葉いもちの発生を抑制し、地区内に伝染源となるような圃場が存在しないようにすることが必要です。

表1 穂いもち発生程度に対する葉いもち発生程度の影響(3カ年全716事例)

調査地域	調査地区	7月下旬における葉いもち発病株率	収穫期における穂いもち被害度			
			20以上	20未満	計	割合
I	A	8%以上	0	1	1	0.5
		8%未満	1	184	185	99.5
	B	8%以上	0	1	1	1.0
		8%未満	0	95	95	99.0
II	C	8%以上	0	1	1	1.6
		8%未満	0	63	63	98.4
	D	8%以上	4	10	14	14.4
		8%未満	2	81	83	85.6
II	E	8%以上	0	0	0	0.0
		8%未満	0	96	96	100.0
	F	8%以上	0	0	0	0.0
		8%未満	0	64	64	100.0
	G	8%以上	0	0	0	0.0
	8%未満	0	113	113	100.0	

表1補足
 ※調査地域IとIIは同一市内で気象条件が類似しており、異なる防除体系で「ひとめぼれ」を栽培している地域
 ※葉いもち防除は調査地域I、IIとも箱施用剤使用、穂いもち防除は調査地域Iでは無防除、調査地域IIでは50~60%程度の圃場で実施
 ※調査は各調査地区(A~G)あたり4~9地点、各地点あたり8圃場程度で調査を実施
 ※平成26年はCおよびF地区の調査は実施しなかった

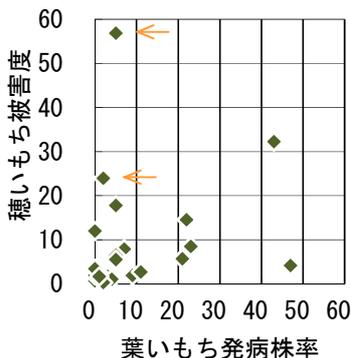


図1 D地区における各調査圃場の葉いもち発病株率と穂いもち被害度の関係(平成25年)

葉いもち発病株率が20%を超える圃場が地区内にあったD地区では、葉いもちの発生が少ない(発病株率8%未満)圃場でも穂いもちが多発(被害度が20以上)した事例が認められた(←の2事例)。この地区では、7月下旬時点で葉いもちの病勢が進展した圃場が認められたことから、育苗期に感染した苗の持ち込みや葉いもち防除の不徹底による早期発病があったものと考えられる。

【2 留意事項】

- (1) 本成果は平成23、25年および26年の調査結果に基づくものであり、気象条件等によってはいもち病による被害発生リスクは変動する場合があります。
- (2) 防除体系を検討する場合は、被害発生リスク以外に農薬代などのコストや栽培条件(肥培管理、地理的・気象的条件など)などを考慮する必要があります。特に穂いもち防除の実施については、葉いもちの発生状況を広域的に把握した上で判断する事が重要です。